



収穫の終わったサツマイモ畑の真ん中に、5棟のガラス製温室がこつ然と現れる。成田空港から東へ約15キロ、都心から車で約1時間半の千葉県栗原町。新年を迎えたばかりの2日、温室の中には男女7人が集まり、大きなこたつを囲みながら、今年の夢を語り合った。

温室群は、NPO法人ミレニアムシティが建設中の、新都市の二部だ。一つ40坪ほど(約130平方メートル)の広さの温室内には高床式の小屋(広さ約3・3平方メートル)が4〜12戸、計37戸ある。寝室や倉庫、趣味の部屋にも使える。共用のダイニングキッチンや浴室。首都圏の会社員や芸術家などが、週末に遊びに来ては夜、「こたつ」で寝袋にくるまる。

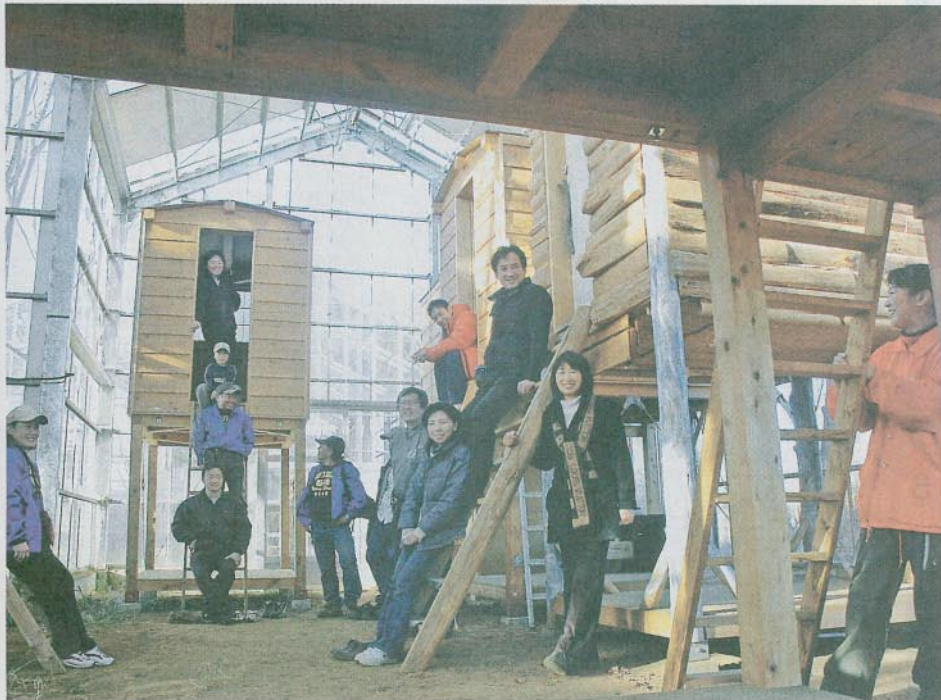
設計者の一人、一級建築士井口浩さん(45)は、「ふれあいと自然を大切に『都市』と説明する。10年ほど前、独立前の会社で、都心の超高層マンションの建設計画に事業者側の一員として参加した。

『住民参加型の再開発』という触れ込みは建前ばかりで、住民



井口 浩さん

すきま風入る小屋 でもあったかい



他人同士夢語る家

説明会は単なる「儀式」だった。開発はいつも行政やデベロッパー主導で、住む人たちの意見は無視される。「自分の住みたい都市を自分でつくろう」。建築家仲間の小野加瑞輝さん(52)と2000年にNPO法人をた

設立し、2年かけて、どんな都市に住みたいかを話し合

を借り、賛同者を募って、建設費用約5000万円を集めたSFテレビ人形劇「サンダーボード」の基地から発想した。井口さん。

農家から約500坪の敷地を借り、賛同者を募って、建設費用約5000万円を集めた。小野のオーナーになるに、初期費用32万5000円に月々6000円。「こたつ」は金持ちでなくても家を持てると井口さん。

すきま風の入る小屋は冷暖房もなく、現実的には定住は難しい。それでも、「こたつ」で夜中まで語り合うのが楽しくて、スケジュールをやりくりしても来てしまう」と小野さんは話す。隣接する敷地に定住用の住宅建設を計画し

ており、2500人にまで膨れあがった会員らと、「新しい街」のアイデアを出し合う。ミレニアムシティは「千禧の都市」という意味。「後世に残る街に」という願いを込めた。

* 1平方メートルあたりの人口が1万人以上の地域では、周囲に知り合いがいない人が42・0%を占める日本の大都市(国土交通省の2005年調査)。人や地域とのつながりを取り戻そうという試みは、東京都世田谷区の共同住宅でも、4年前から始まっていた。

築150年の古民家を借り受け、「松陰コモンズ」と名付けた住宅には、職業も年齢もバラバラな男女7人が住む。それぞれが個室を持



狩野三枝さん

一人暮らし だけど7人暮らし

ち、風呂、トイレ、台所は共同。20畳の大広間は、周辺の住民にも貸し出しており、近所の主婦や若者も時折やってくる。

「地域みたいな家」を作ることを目標に、NPOコレクティブハウジング社が企画。住民は、家賃として月3万5000円を同社に支払って、実験に参加している。夏の縁側でのビール、冬の庭での焼き芋。ふれあいの場所は自然に生まれ、小さな試行錯誤が続く。

開設当時から住んでいる派遣社員、橋本弘美さん(42)は昨年10月、ほかの居住者たちにメールを送った。「家が汚い。もう我慢出来ません」

すぐに共用部分の掃除担当が決まった。橋本さんは「一人暮らしだけど、7人暮らし。不思議な関係」と笑う。

松陰コモンズを企画した同社理事の狩野三枝さん(39)は、「他人と一緒に住む煩わしさがあっても、それを越える良さがある」と話す。多様な世代と一緒に暮らす同様の試みは、各地で広がりを見せ始めている。

狩野さんは提案する。「近所づきあいや人とのふれあいが心地いいことと気づき始めた若者も増えていく。『住まい方の選択肢』を増やしていくことが必要ではないでしょうか」

◇ 古いものを壊しては、新しいものをつくり続けてきた日本の大都市。ぬくもりを求めて、「街を変えよう」という試みを始めた各地の現場を紹介する。

↑ 温室内に作られた小屋はプライバシーを守るために高床式。メンバーは都合のいい日にこたつに来ては、新しい都市像を語り合う